もくじ

まえがき ……i

1章　東大入試を［読み解く］……3
東大は受験生に何を求めているのか？
STEP. 1　東大入試と「論理力」……4
“鋭い発想”よりも、「ありきたりな論理性」が大切
STEP. 2　東大入試と「表現力」……8
問題解決力より重要な「コミュニケーション能力」
STEP. 3　東大が求める「情報処理能力」……12
“ゲーム”としての入試に勝つ「要領」をつかめ！
STEP. 4　合格最低点の分析……15
“潜在的合格可能層”は増加している！

2章　合格者を［解剖する］……19
なぜ受かるのか、なぜ落ちるのか
STEP. 1　合格者の実態分析……20
要領よく受かった合格者から“情報処理技術”を盗め！
STEP. 2　合格パターンの分析……25
残り1年での逆転を可能にする合格パターンとは

3章　合格目標を［シミュレートする］……33
合格最低点から導く効率的受験計画
STEP. 1　センター試験の目標設定……34
“2段階目標”を掲げる東大シフトのセンター対策
STEP. 2　2次試験の目標設定……40
合格最低点を目標にした現実的な得点計画を立てろ！

STEP. 3　科目別目標ライン……45
「しのぎ」「クリア」「勝負」の三つの目標設定
STEP. 4　現時点の実力把握……57
センター試験で把握する東大チャレンジ・ライン
STEP. 5　戦術シミュレーション……62
2次試験突破の得点シミュレーションを描く

4章　合格戦略を［構築する］……71
模試を最大活用する年間プランの策定法
STEP. 1　東大への受験計画……72
夏までの「底上げ期」、夏以降の「個別対策期」
STEP. 2　模試の活用法……80
模試をペース・メーカーにする東大型受験計画
STEP. 3　模試のペース・メーカー機能……84
目的・目標に合わせた模試スケジュールの組み方
STEP. 4　年間目標の設定法……94
8月と11月が、計画修正のターニング・ポイント

5章　科目別・合格ラインを［超える］……101
科目別・目標別・勉強法の実践メニュー

PART. 1　東大英語の攻略法……101
STEP. 1　戦術のアウトライン……102
東大英語は“リスニング・シフト”で迎え撃て！
STEP. 2　「東大用の読解力」の分析……106
“読めば読むほど”東大英語はカモになる！
STEP. 3　レベル別・攻略メニュー……110
「精読期」から「速読期＋総合問題期」まで

STEP. 4　リスニング対策 ……125
5ステップ方式による東大リスニング攻略
STEP. 5　戦術の転換期 ……138
夏休み前の自己分析で、戦術の修正をはかれ！
STEP. 6　“パーツ攻略”のメニュー ……144
頭脳的なピン・ポイント攻撃で得点力アップ

PART. 2　東大数学の攻略法 ……159

STEP. 1　攻略のコンセプト ……160
確実にガードを固めてから、“攻め”に転じろ！
STEP. 2　暗記数学の方法論 ……166
東大数学の攻略の切り札になる「暗記数学」
STEP. 3　レベル別・攻略メニュー ……168
東大シフトで組む「解法暗記」から「実戦演習」まで
STEP. 4　問題集の使い方 ……186
問題集は“特性”に合わせて“適材適所”で使え！

PART. 3　東大国語の攻略法 ……191

STEP. 1　戦術のコンセプト ……192
30～150時間で乗り切る“東大型”国語対策
STEP. 2　科目別・攻略メニュー ……196
“使える時間”を意識した問題集の選択がカギ
STEP. 3　時間別のモデル・プラン ……212
30～150時間の“制限”を設けた全体計画を考えろ！

PART. 4　東大社会の攻略法 ……217

STEP. 1　戦術のコンセプト ……218
選択する2科目の“役割分担”をハッキリさせろ！

STEP. 2　科目の組み合わせ術 ……223
選択した2科目を最大限に活かす“連携プレー”
STEP. 3　科目別攻略法 ……228
問題分析と経験者のノウハウから導く“特効対策”

PART. 5　東大理科の攻略法 ……277

STEP. 1　戦術のコンセプト ……278
「時間」ではなく「問題の数」で攻略する！
STEP. 2　科目別・攻略メニュー ……283
「傾向」と「対策」をふまえた短期・効率対策

PART. 6　本番での答案作成術 ……325

STEP. 1　科目別・本番戦術 ……326
「知らないと20点損をする」、本番戦術の“秘策”

お知らせ――あとがきにかえて ……336

STEP. 1　東大入試と「論理力」

“鋭い発想”よりも、「ありきたりな論理性」が大切

POINT 1　求める“人材”の分析

大学入試は「落とすための試験」ではなく、ほしい受験生を見抜くためのものであるというのが私の考えだ。この観点に立って、東大が受験生に求めている“能力”について具体的に明らかにしていきたい。最初は「論理力」である。

鋭いヒラメキや“博学多才さ”は東大入試では不要

世間一般で「東大生は頭がいい」とよく言われるが、これを「鋭い」とか「天才的である」と誤解してしまう人がいる。もちろん、中には本当に天才的な人材がいるのかもしれないが、東大生全般を特徴づける“頭の良さ”とは、その種の才能ではなく、ただ単に「まともな論理性を身に着けている」ことにすぎない。

これは、東大の入試問題を見るとよく分かる。鋭いヒラメキもいらないし、人が知らないようなことまで知っている“博学さ”もいらない。求められているのは、たかだか「理詰めでものを考えられる能力」、すなわち一般的な意味で言われる「論理力」なのである。

「論理力」というと非常に抽象的だが、簡単に言ってしまうと、「AだからB、BだからC、したがってAだからC」という考え方がしっかりできるかということだ。

受験生ならば「論理力が大切」ということは、耳にタコができるほど学校の教師や予備校の講師から聞かされているだろう。数学だけでなく、現代文の教師も「論理的に考えろ」と教える。では、いったい論理力とは何か、特に東大が求めている論理力とは何かを考えてみたい。

「暗記科目」の社会でも「論理」が求められる

「論理力」でイメージされる教科は数学であるが、東大の場合、数学以外の教科でもしつこく受験生の論理力を試してくる。一般に「暗記科目」と考えられている社会の入試問題を、他の大学と比べてみると一目瞭然である。

たとえば、早稲田のような難関私大の社会は、重箱の隅を突っつくような細かいところまで問題にされる。「Aは何か」、「Bは何か」ということを聞いてくるわけだ。

ところが東大の社会の問題では、たとえば『日本史Q＆A』（山川出版社）で求められるような“クイズ的知識”はほとんどいらない。その代わり、たとえば歴史でも「AだからB」のように、AとBをつなぐ「論理」が求められるのである。

これに関しては、東大の教官もはっきり断言している。総合文化研究科教授の義江彰夫氏（2006年に退官）は、『東京大学新聞』（東京大学新聞社）で具体的な例を出してこう発言されている。

「（前略）ただ羅列的に丸暗記するのではなく、前後の流れのなかにその史実を位置づけ、その意味や役割について考えることが大切なのです。例えば19世紀半ばになると欧米からの黒船がしばしば日本にやって来、それと平行して倒幕運動が盛んになり、ついに1868年明治維新となるわけですが、これらの事実をただ棒暗記するのではなく、なぜこのころ黒船が頻繁にくるようになったのか、又それがなぜ国内の倒幕運動を盛んにする役割をはたしたのか、さらに、どうしてその結果が欧米の植民地ではなく、天皇を頂点とする近代国家の樹立に至ったのかなどを総合的に考えることが歴史を学ぶ目的だと思います」（『東京大学新聞』平成８年９月24日号より）

東大の日本史の問題を見た人なら分かるが、これほどストレートに、試験問題に込められた意図を明らかにした発言もない。

重要になるアウトプット・トレーニング

東大の教官の発言をもう一つ紹介しよう。これは、総合文化研究科教養学部広域科学専攻助教授・渡邊雄一郎氏が、生物の勉強法に関連して東大受験生にアドバイスしたものだ。

「(前略) 生物を学ぶにあたって、暗記しなければいけないものがあるのは確かである。ただ、これは新しい言語を覚える際にある程度の数の単語を覚えるようなものであり、(中略) 東大の生物の試験問題では、そうした基礎をふまえた応用力、洞察力、そして論理的思考が試されているのではないだろうか。(後略)」(『東京大学新聞』平成14年9月10日号より)

これも入試問題を見れば一目瞭然だ。東大の生物では、教科書や模試などではまずお目にかからない、かなり高度な実験などが題材となる。しかし、その問題を解くために、教科書レベルを超える高度な知識は必要ない。実際には、教科書の基本的な知識をもとに考えれば解けるように、うまく作られているのだ。

認知心理学のモデルでは、思考とは「知識を用いて推論を行うこと」と定義される。東大が求める「頭の良さ」＝論理力も、まさに知識を「使って」正しく「推論する」能力のことを指す。

これは、別に“特異な能力”ではなく、受験勉強を通して誰でも身に着けられる。そのためには、基本知識をインプットするのは当然だが、蓄えた知識を引き出して使うアウトプット・トレーニングが決定的に重要になる。早い話が、東大の入試傾向に合った問題をたくさん解きながら、知識の引き出し方・使い方を習得していけばいいのだ。アウトプット・トレーニング中心の受験勉強によって結果的に「頭が良くなる」わけで、「生まれつき頭がいい」から東大に受かるのではない。この点は特に強調しておきたい。

「論理」を重視する東大の採点スタンス

論理力重視は、採点のスタンスにもよく表れている。以下は、東京大学大学院理数科学研究科教授・河東泰之氏の発言である。

「(前略) 受験生はよく『完答○点』というようなことを言いますが、最後まで計算が続いていて正答が書いてあるというのと、完全な論理によって正答が表現されている、というのとの間にはかなり大きな差があります。とは言っても別に重箱の隅をつついて減点してやると思っているわけではないので、明確な論理がきちんと書いてあれば、かなりの勘違いや計算ミスがあっても評価できる点は評価します。そういう答案の方がいいかげんな理由によってとりあえず正答に達している答案より評価が高くなるということもしばしばありえます。(後略)」(『東京大学新聞』平成14年9月10日号より)

ここでは、いい加減な論理による正答より、たとえ誤答でも明確な論理が貫かれている答案のほうに高い評価が与えられることもあると、河東氏が言い切っている箇所に注目してほしい。

論理力を身に着ける受験勉強法とは

では、東大が求める論理力を身に着けるには、どういう勉強法を実践すればいいのか。一つは、前述したように、覚えた知識を使う練習＝アウトプット・トレーニングを重視することである。

もう一つは、知識を暗記する段階では、できるだけ「理解しながら覚える」ということだ。そのためには、勉強のやり方を工夫する必要があるし、参考書の選択も重要になる。

実際、東大合格者たちが実践してきた勉強法をモニターしてみると、この2点に関しては、かなりの共通点を見いだせる。5章以降では、こうした情報を集約する形で科目別攻略法を紹介したい。

STEP. 2　東大入試と「表現力」

問題解決力より重要な「コミュニケーション能力」

POINT 2　表現力重視の傾向分析

東大の入試問題が要求する第２の柱は「表現力」である。ただし、美しい文やレトリカルな表現が求められているわけではない。ここでは、入試の実例や東大生、教官の証言を交えながら、東大が求める「表現力」の内容を分析する。

数学の答案にも求められる日本語の「表現力」

東大が受験生に求める二つ目の能力は「表現力」である。この言葉から、国語や社会などの論述問題を思い浮かべる人も多いだろう。しかし、数学のような理系科目でも、同様の「表現力」が求められる。先の河東泰之氏の発言にもう一度耳を傾けてみよう。

「一番言いたいことは、ちゃんとした日本語で自分の考えたことを論理的に表現する訓練をして欲しい、ということです。受験勉強のときも本番の試験でも、そして大学に入った後も、常にそのように心がけて努力することによって、自分の考えを正確に伝えることができ、また間違いを防ぐことができると思います。正誤をいう以前に、数学的に意味をなしていない文章しか書けない人が大学に入った後でも少なからず見受けられます。A＝Bというような式を書くとき、それは仮定したのか、そのようにおいたのか、これから証明することを書いたのか、これまでにわかった結論を書いたのか、きちんと表現されていないということ以前に、そもそも自分の頭の中でもちゃんと整理されていないのではないかと思わせる人が多すぎます（後略）」（『東京大学新聞』平成14年９月10日号より）

要するに、数学の答案でも、日本語で人に分かるように（論理的に）表現する力が求められているわけだ。頭がいい人、鋭い人はたしかにいる。しかし、それを他人に向けてどう表現すれば伝わるかに無頓着な人が少なくない、ということなのである。当然のことながら、表現力が足りない答案は容赦なく減点されるであろう。

「コミュニケーション能力」重視の教養改革

東大入試では、昔から記述・論述主体の「表現力重視」を一貫して打ち出してきた。この傾向に拍車をかけたのが、平成５年から始まった教養学部のカリキュラムや基本理念の抜本的改革、いわゆる「教養改革」である。ここで重視されたのが、いわゆる「コミュニケーション能力」である。

実際、東大の「教養改革」で何が一番変わったかというと、英語のカリキュラムである。たとえば、大学の試験では、読解と合わせてリスニングも同じ比率で重視される。授業でも、視聴覚のビデオ教材が取り入れられている。

また、教養学部の「基礎演習」という講義でしばしば使用されるテキスト『知の技法』（東京大学出版会）など『知の』シリーズは、一般書としてもベストセラーになったことで有名だが、この本では「表現、発表の方法」がテーマになっている。

このように、東大の教養改革では、表現力、コミュニケーション能力の開発を柱とするが、これは入試問題にも反映される。たとえば、リスニングや英作文の配点増加や、後期試験で論文試験を課すなどの措置も、その一貫としてとらえることができる。

東大の英作文に見る「表現力」の分析

東大の英作文の出題形式や傾向を追っていくと、東大が求めている「表現力」の内容がよくわかる。基本的には、「簡潔にして的確

著者紹介

和田　秀樹（わだ・ひでき）

1960年大阪市生まれ。灘高から東京大学の理Ⅲに現役合格。東大医学部精神神経科助手、カールメニンガー精神医学校での在外研修を経て、精神科医として病院勤務を続けるかたわら、幅広く執筆、評論活動を展開している。現在、国際医療大学大学院教授。

灘高時代に劣等生から抜け出した体験をもとに書いた『受験は要領』（ごま書房）がベストセラーになり、その後も意欲的に受験技術書を出版、『神話崩壊　やさしくなった東大合格』（文藝春秋）、『和田式要領受験術・数学は暗記だ！』（ブックマン社）などの著書がある。予備校顧問のほか、「緑鐵受験指導ゼミナール」の監修者として独自の指導を展開して実績を上げている。

最新の精神医学に基づく受験論『受験勉強は子どもを救う』（河出書房新社）がマスコミや受験界の注目を集め、雑誌や新聞の評論活動でも活躍中。『「あいだ」の空間』（トーマス・H・オグデン著・和田秀樹訳、新評論）や『多重人格』（講談社）など、意欲的に翻訳、執筆活動を行っている。

2007年度版　新・受験技法——東大合格の極意——

1997年3月30日　初　　版第1刷発行　（検印廃止）
1998年2月28日　改　訂　版第1刷発行
1999年4月25日　最　新　版第1刷発行
2000年4月25日　新　訂　版第1刷発行
2001年5月15日　2002年度版第1刷発行
2002年5月20日　2003年度版第1刷発行
2003年5月20日　2004年度版第1刷発行
2004年5月20日　2005年度版第1刷発行　著　者　和田秀樹
2005年5月25日　2006年度版第1刷発行
2006年5月25日　2007年度版第1刷発行　発行者　武市一幸

発行所　株式会社　新評論

〒169-0051
東京都新宿区西早稲田3－16－28
電話　03（3202）7391
振替・00160-1-113487

定価はカバーに表示してあります。
落丁・乱丁はお取り替えします。
http://www.shinhyoron.co.jp/

印　刷　フォレスト
製　本　桂川製本
装　幀　山田英春

© Hideki WADA 2006

Printed in Japan
ISBN 4-7948-0700-7 C7037